

## 「個人主義」「現状主義」「保守主義」を超えて

弘前大学大学院教育学研究科長 福島 裕 敏



駆け抜けるような春爛漫の季節の訪れの中、弘前大学教職大学院に第6期生20名が入学しました。またこの3月には、2コース制から4コース制へと生まれ変わった「セカンドステージ」初の修了生を送り出すことができました。

さて、今年度から第4期中期目標・中期計画期間に入りました。国立大学法人は、6年を1サイクルとして、文部科学大臣が示す中期目標に基づいてそれぞれ中期計画を作成し、その達成を目指すことになっています。弘前大学教職大学院では、「教育課題の解決に向けて省察し互いの専門性を生かし合いつつ学び続ける教員集団の中核を担う教員

を養成・支援するために、青森県教育委員会等と連携し教員のキャリアステージを視野に収めた教員養成・研修プログラム開発と支援体制の整備を行う」ことを、その計画としています。引き続き、理論と実践との往還・融合を通じた省察をもとに、青森県が直面する教育課題の解決をめざした教育実践を創造しリードしていく教員の養成・研修・支援をおこない、学び続ける教員集団のネットワークの一つの起点になっていければと思います。

ところで、昨年11月、長らくその翻訳が待望されてきた、アメリカの社会学者ローティが1975年に著した『スクールティーチャー』の訳書が刊行されました。ローティは、教職の特徴である仕事の目的・目標・効果・結果・価値すべてにわたる「不確実性 (uncertainty)」が、「個人主義 (individualism)」「現状主義 (presentism)」「保守主義 (conservatism)」という三つの職業エートス (感情・思考・行動の志向性) をもたらしていると指摘しています。その上で、教師たちが状況の変化に適応し、確たる同僚的な絆を築き、自分たちの専門的な知識を改善していくためには、分析的・探究的実践に向けた教師の専門的知識基礎や同僚的関係の構築、教師－研究者 (teacher-researchers) 集団の開発等が必要であると主張しています。刊行から50年近くが経った「不確実性の時代」と称される現代社会において、教職の「不確実性」は以前にも増して高まっているように思います。あらためてローティに学びつつ、「個人主義」「現状主義」「保守主義」に陥ることなく、「不確実性」と正面から向き合い教育実践を創造しリードする教員を育て・支える場として、教職大学院の教育研究活動を充実させていきたいと思っています。今後ともご支援ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

## 大学院教員を校内研修会等で**無料**でご活用ください！

教職大学院では、本大学院教員を謝金、旅費ともに無料で、各校の校内研修会、小・中学校教育研究会等に講師として派遣する活動を行っています。

この活動は、本大学院の現職教員院生が、講師派遣の依頼を受けた大学教員に帯同して研修会等に参加させていただくことで、研修会等の運営の仕方を学ぶこと等を目的としており、本大学院の実習の一貫として行われるものです。

講師派遣の申込方法は極めて簡単で、A4判申込用紙1枚に必要事項を書いてFAXで送信するだけです。

申込用紙の様式は、本大学院のHPに掲載していますので、御覧ください（「弘前大学大学院教育学研究科」で検索）。事後の面倒な報告書の提出等は一切ありません。

申込は随時受け付けますが、申し込みが早ければ早いほど、皆様のご希望の開催日に実施できる可能性が高くなります。ぜひ、ご検討ください。

## 教職大学院新任教員紹介

この4月に教職大学院に人事異動がありました。敦川真樹教授が退職、上野秀人教授が弘前大学教育学部へ異動をし、新たに三戸延聖教授、若松大輔助教を迎えました。2名の先生方を紹介いたします。

### 三戸延聖教授

#### 「先從隗始」



2017年度に弘前大学教職大学院がスタートした当時の2年間、県からの交流人事による実務家教員としてお世話になりました。今春の異動で3年ぶりの復帰となりました。教職大学院は4つの理念のもと現在に至っています。端的には「自律」「探究」「協働」とそれらを束ねる「省察」です。

県に戻ってからは、様々な局面でこの4つの力の往還を意識に置きながら判断し、実践してきました。それは自分に対する「先ず隗より始めよ」という心の声からです。この間、教育行政を担う事務方や指導主事が学校のバックヤードとして昼夜を<sup>お</sup>かず働く姿を管理職として見守ってきました。彼らの仕事は常に縁の下にあるのですが、できて当たり前、脚光を浴びることはありません。

「正しいこと」同士のせめぎ合いの中での調整の難しさ、一滴の発想を絞り出す苦しさ<sup>お</sup>と喜びをともに分かち合ってきました。もともと高校教員の私が皆さんに伝えることは、彼らはどのように学校を支えているのか、その仕組みについて理解を深めてもらうことだと思っています。「学校教育と教育行政」「学校安全と危機管理」「教職員の職能成長」の授業を担当します。よろしくお願ひします。

### 若松大輔助教



この4月に着任しました若松大輔と申します。これまでカリキュラム開発や授業づくり、教育評価、教師の力量形成について研究してきました。とりわけメインの研究は、アメリカを中心に展開されてきた「教師の知識」に着目した教師教育論です。教師の学びには「省察」が要になるわけですが、その省察をより効果的かつ重厚なものにするためには、もう一方で豊かな<sup>お</sup>枠組み（日本では「観」と表現されてきたもの）も重要であると考えています。この「枠組み」や「観」を（再）形成するために、「省察」と並んで「知識」の習熟も鍵になるだろうというのが、私の現時点の見立てです。このような

考えから、教職大学院では様々な論点や理論あるいは実践を提供できるように努めてまいります。

この自己紹介文を書いているときに、ふと『被抑圧者の教育学』等で知られているブラジルの教育学者パウロ・フレイレが、1985年のインタビューで語っていたことを思い出していました。「私は教師であることを愛しています。……教師は専門職であり、ある種の力量や美徳を絶え間なく改善し成長させることを求める専門職なのです。これらの力量や美徳は、授けられるものではなく、つくり出されなければなりません。自分自身を日々新たにできる能力は非常に重要です」。ここで言う「教師」とは、私のことでもあります。日々みなさんと一緒に考え学んでいくことを楽しみにしております。

## 2023年度の教職大学院の入試について

2023度の新たな院生を迎える入試が下記のように決まりましたのでご報告いたします。

【推薦特別選抜・一般選抜の試験日・出願期間及び進学説明会の日程】

第1期……推薦特別選抜・一般選抜：令和4年10月1日（土）

[出願期間は8月29日（月）～9月2日（金）、説明会は7月27日（水）午後4時]

第2期……推薦特別選抜・一般選抜：令和4年11月26日（土）

[出願期間は11月7日（月）～11月11日（金）、説明会は10月26日（水）午後4時]

第3期……一般選抜：令和5年1月7日（土）

[出願期間は12月12日（月）～12月16日（金）、説明会は12月9日（金）午後4時]

ただし、第1期入試又は第2期入試の合格者が募集人員18名に達した場合、コースによっては以降の募集を実施しない場合があります。

\*詳しくは、ホームページの入試情報をご覧ください。



## 入学院生からのメッセージ

\*ミドルリーダー養成コース

安 保 愛 子（青森市立油川小学校）



教職大学院に入って2週間が経ちましたが、他校種の同僚のミドルの先生方、ストレートマスターの皆さんと共に、専門的な

講義や演習等でたくさんの刺激を受け、充実した生活を送ることができています。このような学びの場をいただけたことに深く感謝しています。これまでは、日々の業務に追われ、時間をかけて学ぶことがほとんどなく、知識不足を感じていました。教職大学院では、今まで自分が「当たり前」として指導してきたことに疑問をもち、理論と結びつけて考えたり、理論を学ぶことで自分の考える引き出しを増やしたりしていきたいと思えます。この2年間は、現場に戻った際に、同僚の先生方に学んできたことを還元し、子どもたちのた

めに力を尽くせるよう、積極的に学んでいきたいと思ひます。

**大 池 由紀子 (十和田市立大深内中学校)**



3月に4度目の卒業生を送りました。卒業式を行う度に「教師の仕事っていいものだなあ」と実感することができます。しかし、卒業式を迎えるまでの

過程では、たくさんの迷いや葛藤がありました。自分の教師としての力量不足を感じ、自分の思い描く理想の教育論が通用しない現実の中で、改めて自分自身と向き合い、成長する必要があると感じました。教職大学院での学びが、様々な経験の中で作り上げられた「教師としての私」を『進化』させるきっかけとなるように、たくさんのことを吸収したいと思ひます。そして、大学院へ行く機会を与えてくださった皆さんと、これから出会う未来の生徒たちに、学んだことを還元できるように頑張ります。

**葛 西 史 生 (青森県立弘前高等学校)**



教職大学院の学びは、自身の教科指導や生徒指導、学級経営などこれまでの教員としての実践を振り返り、新しい気づきを得ることができる絶好の機会だと

考えています。今回、このような学びの機会を与えていただいたことに感謝しております。入学して2週間ほどたちましたが、日々の授業のなかで新しい発見をすることができ、充実した生活を送ることができています。他校種の現職教員の方や、ストレートマスターの皆さんと学びあうことができるこの機会を大切に、将来は生徒に還元することができるように、テーマを持って学び続けたいと思ひます。

**柏 崎 康 司 (八戸市立湊中学校)**

20数年中学校の現場で働いてきましたが、この春から弘前大学教職大学院にて新たな学びを始めることとなりました。正直なところ不安



はあります。しかし、入学して日を追うごとにやる気に満ちてきている自分もいます。この2年間は、如何なる学習内容でも意味を見出し、楽しみながら課題

解決につなげていこうとする気持ちを大切にしていきたいです。また、今までの教職人生で教材研究から得た知識をもとに、教員としての体幹を作り直す時間としたいと考えています。そして、2年間という貴重な機会をいただいたことに感謝し、積極的に学んでいきたいと思ひます。

**工 藤 涉 太 (つがる市立木造中学校)**



教職に就き、10年以上が経過しました。これまでは学校現場でしか学べない、様々なことを経験させていただきました。その中で、近年は自分自身が新たな学

びに対応するため、教育について学び直す必要性があると感じていました。弘前大学教職大学院で、教育への理解を深め、発展させ、青森県の子供たちや現場で働く教職員の仲間たちに少しでも還元したいと思ひます。2年間という時間を最大限に活かし、有効に活用し、前向きな気持ちを忘れず、研鑽に努めます。

**佐 藤 大 記 (青森県立青森若葉養護学校)**



教職大学院に入学し、まだ1週間しか経っていませんが、すべてのことが新鮮で、すべてのことが学びにつながっていることを実感する毎日

を過ごしています。その中の1つで、「教育の専門家」という言葉に感銘を受けました。私は民間企業での経験がありますが、常にその仕事へのプロ意識をもって職務に専念していた記憶があります。教職に就いてからは、日々の忙しさを

理由に自らの指導について省察する機会は数えるほどしか無かったように思います。教育の専門家としてのプロ意識を今一度考え、学ぶためにいただいた貴重な2年間を無駄にせず、学んだことを子どもたちのために活かせるよう、自己研鑽したいと思います。

**寺山 陽子 (弘前市立新和中学校)**



これまで、生徒たちには「夢をもってほしい。」という話をしてきました。しかし、何にも挑戦できていない自分がいました。自分自身の教員生活を振り返り、今何ができるか、何をしたいか考え、教職大学院を目指しました。今回このような機会をいただき、勤務校の先生方や家族には感謝の気持ちでいっぱいです。現在、毎日脳にかかる負荷の多さにおぼれそうですが、それもまた楽しく学びたいことがたくさんあります。自分の可能性を最大限広げられる1年になるよう頑張ります。

また、教育界は学習指導要領の改訂、ICTの活用など常に情報を更新していく必要があります。そのような状況で教職大学院に入学できたことは貴重な機会であると思います。授業を受けながら理論を学び、実習を通して課題を見つけ、実行して反省し、改善することを繰り返しながら前に進んでいきたいです。また、学部卒の院生と授業を受ける機会も多く、意見を交換し、情報を共有することも大切にしたいと思っています。現職の教員のまま学べることに感謝し、2年間を充実したものにしていきたいです。

**雪田 聡 (青森県立田名部高等学校)**



教員に採用されてから担任、学年主任など色々な経験をしました。一方で業務に追われ、自分の取り組みを振り返ることができていなかったと痛感しています。

また、教育界は学習指導要領の改訂、ICTの活用など常に情報を更新していく必要があります。そのような状況で教職大学院に入学できたことは貴重な機会であると思います。授業を受けながら理論を学び、実習を通して課題を見つけ、実行して反省し、改善することを繰り返しながら前に進んでいきたいです。また、学部卒の院生と授業を受ける機会も多く、意見を交換し、情報を共有することも大切にしたいと思っています。現職の教員のまま学べることに感謝し、2年間を充実したものにしていきたいです。

**\* 学校教育実践コース・教科領域実践コース**

**鳥元 帆乃佳 (学校教育実践コース)**



私は、本学の養護教諭養成課程で4年間を通して養護教諭になるために学んできました。しかし、様々な実習を通して連携の大切さを実感

し、学級担任の先生方が大切にしていることや他の先生方がどのようなことを考えて子どもたちと接しているのかなど、学校教育全体に関わることを学びたいと考え教職大学院へ進学しました。入学して2週間ほどになりますが、授業では演習やグループ活動などで様々な意見を聞くことができ、新たな視点を得ることができているように感じます。2年間の学び合いを通して、これから関わる子どもたちがより安心して、学ぶことができる学校環境づくりに寄与できる養護教諭を目指していきたいと思っています。

**新田 ひかり (学校教育実践コース)**



私は教育学部小学校コースから教職大学院に進学しました。同期には現職の先生方に加え、関わりの少なかった中学校コースや養護教諭課程から進学した学生も居り、大学生活とはまた違った院生活ができるのではないかと、2年間を楽しみにしています。教職大学院では特に「課題探究力」を身につけたいと考えています。学校が直面している教育的課題に対し根拠のある解決を試みることができるよう、学校教育に対する知識・理解を、研究と実践を踏まえることでより深化させ、自分なりの教育観・教育論を定めることを目標としています。

また違った院生活ができるのではないかと、2年間を楽しみにしています。教職大学院では特に「課題探究力」を身につけたいと考えています。学校が直面している教育的課題に対し根拠のある解決を試みることができるよう、学校教育に対する知識・理解を、研究と実践を踏まえることでより深化させ、自分なりの教育観・教育論を定めることを目標としています。



**藤田 晟 雅 (学校教育実践コース)**



教育学部小学校コースから進学してきました。学部生のころは、ネットいじめといじめの変容について研究してきました。教職大学院では少し変わり、授業

UDについて研究したいです。障害の有無や学習の得意不得意に関係なく、学びやすい環境、授業づくりをしていけるように、2年間で、知識と実践力を身に付けていきたいです。また、学部生のころとは違い、現場で活躍してきた先生方と一緒に過ごしていく貴重な経験をすることができるので、盗めるものを盗んで自分なりに噛み砕いて、自分の研究に活かすことができるように努めていきたいです。

**板垣 侑 磨 (教科領域実践コース)**



私は、本学部の保健体育科から進学しました板垣侑磨です。教職大学院への進学のきっかけとなったのは、大学3年次の教育実習へ行った際に、自分の能力

の無さを実感させられたことです。その経験を通して、教職大学院へ進学し、大学院での多くの学びの中で、自分には何が足りないのかを探し出し、それを少しでも改善できるように努めていきたいと考えました。2年間しっかりと研究と修養に努め、教員に求められる資質を高められるように頑張ります。

**猪股 由 惟 (教科領域実践コース)**



教科領域実践コースに進学しました、猪股由惟です。学部の4年間は英語コミュニケーションのゼミに所属し、小学校外国語、中学校と高等学校の英語

教育を中心に学びました。現在、多くの子どもたちは小学校3年生から外国語活動を学び、10

年間の外国語教育を受けることとなります。その原点となる小学校の外国語教育で、コミュニケーションを図ることの楽しさや多様な国の文化を知ることの面白さに気づかせ、その後の英語学習に繋がりたいと考えています。現職の先生方のお話や学校現場での演習、実習からたくさんのことを学び、有意義な小学校外国語教育の実現に向けて精進します。2年間、どうぞよろしくをお願いします。

**瓜生 太 知 (教科領域実践コース)**



私は弘前大学教育学部小学校コースで4年間学んできました。学部の時に行った教育実習やボランティアの学習支援活動に参加し様々な子供たちと関わって

いく中で、児童生徒の生活体験の中から授業を構成したいと考えるようになりました。そこから卒業論文では児童生徒の生活の中から授業に生かせる活動の考案に取り組みました。その中で自分が考案した活動は児童生徒の興味や意欲を引き出すものになっているか考えるようになり、本学で研究したいと考え進学しました。教職大学院では、私のような学部卒生だけでなく現職教員の先生もいらっしゃいます。たくさんのお話を吸収してより大きな教員になりたいと考えています。

**古川 冬 真 (教科領域実践コース)**



はじめまして、この度教科領域実践コースに入学しました。古川冬真です。この2年間で青森県の健康課題の改善に少しでも貢献できるように体育授業を作り

上げていきたいと思っています。そのために、大学院での理論と実践の往還・融合をうまく利用し、少しでも理想に近づけるようになりたいと思います。大学院はとても忙しいと先輩から聞いているので、自分の体を労わりながら2年間元気にいられるように、公私ともに充実していきたいです。

**佐藤 陽奈子 (教科領域実践コース)**

私は、本学の教育学部学校教育教員養成課程を卒業し、多くの実践研究を積み重ねることで教員として働いていくための土台を築きたいと考え、この教職大学院に進学しました。青森県で生まれ育ち、豊かな自然と恵まれた教育環境の中で様々な学びを経験してきました。青森県で生まれ、教育を受ける子どもたちが、故郷への熱い思いをもって全国や世界各地へ羽ばたいていけるように、県教育について課題意識を持ち、教育現場での実習や様々な講義から積極的に学び続けていきたいと考えております。2年間、よろしくお願いいたします。

私は、本学の教育学部学校教育教員養成課程を卒業し、多くの実践研究を積み重ねることで教員として働いていくための土台を築きたいと考え、この教職大学院に進学しました。青森県で生まれ育ち、豊かな自然と恵まれた教育環境の中で様々な学びを経験してきました。青森県で生まれ、教育を受ける子どもたちが、故郷への熱い思いをもって全国や世界各地へ羽ばたいていけるように、県教育について課題意識を持ち、教育現場での実習や様々な講義から積極的に学び続けていきたいと考えております。2年間、よろしくお願いいたします。

**高田 真那 (教科領域実践コース)**

私は弘前大学教育学部の小学校コースから進学しました。大学卒業後、そのまま教員として働くことに自信が持てず、大学院での講義や実習を通してより成長し、教師として専門性や実践力を身につけたいと思い、大学院に進学しました。教科の専門性を高めるとともに、児童理解や様々な分野の知識を身に付けたより実践力のある教師、そして児童の心に寄り添うことができる教師になりたいと考えています。教職大学院には様々な経

験を持つ方がたくさんいらっしゃるのでも共に学びながら成長できればと思っています。2年間よろしくお願いいたします。

験を持つ方がたくさんいらっしゃるのでも共に学びながら成長できればと思っています。2年間よろしくお願いいたします。

**土田 康裕 (教科領域実践コース)**

私はこれまで学部での授業や実習を通して、「理科教育において日常生活とどのように関連性を持たせ、積極的な姿勢を育てるか」について研究してきました。特に中等理科教育においては広汎的な内容と専門的な内容の両方に対応する必要がありますため、実験・観察などを通して理論的思考を養うことが重要であり、そのための授業開発が必要であると考えます。そのためには幼児・児童・生徒の学びの過程について深く理解するとともに、実践を通して省察することが重要であると考え、特に実習においては力を入れて取り組みたいです。

私はこれまで学部での授業や実習を通して、「理科教育において日常生活とどのように関連性を持たせ、積極的な姿勢を育てるか」について研究してきました。特に中等理科教育においては広汎的な内容と専門的な内容の両方に対応する必要がありますため、実験・観察などを通して理論的思考を養うことが重要であり、そのための授業開発が必要であると考えます。そのためには幼児・児童・生徒の学びの過程について深く理解するとともに、実践を通して省察することが重要であると考え、特に実習においては力を入れて取り組みたいです。



## 教育実践研究発表会(年次報告会・最終報告会)実施 県外からも御参加いただきました

令和4年2月10日(木)、「教育実践研究発表会」を行いました。当初は、「対面」と「オンライン」で計画しておりましたが、新型コロナウイルス感染症第5波の影響で、急遽オンラインのみでの実施となってしまいました。急な変更にもかかわらず、県内外から大学教員、院生、現職教員、学部生、教育委員会・教育機関関係者等142名御参加いただきましたことに心から感謝申し上げます。

教職大学院では、自らの課題発見と解決に取り組み職能を成長させていく「自律的発展力」、学校・社会が直面する教育課題に真摯に取り組み解決を試みる「課題探究力」、その理論的支えを持った根拠に基づき実践を行い、そこでの実態を踏まえて成果と課題を明らかにしていく「省察力」、課題探究や省察を組織集団として行っていくための「協働力」の今教員に求められる4つの力の育成を目指しています。そのための大きな役割を担っているのが、2年間で3回の発表会です。

1年次には、研究の意義、リサーチアクションの立て方、研究倫理、エスノグラフィとその技法等、研究の基礎を学び、先行研究、理論研究を把握し、教育実践と仮説検証を行い、4頁の「年次報告書」とプレゼンテーション資料を作成し、2月に「年次報告会」を行います。

2年次には、1年次での実践の課題の焦点化・仮説の修正をし実践研究を行い、6頁の「中間報告書」とプレゼン資料を作成し、11月上旬に「中間報告会」を行います。「中間報告会」で明らかになった課題をもとに、さらに教育実践研究を行い、10頁の「最終報告書」とプレゼン資料を作成し、教育実践研究の集大成でもある「最終報告会」に臨みます。1年次の「年次報告会」(午前)と2年次の「最終報告会」(午後)は同日に開催され、この2つをあわせて「教育実践研究発表会」と呼んでいます。

「教育実践研究発表会」は、研究の成果を発表し、質疑応答を通して生み出された知見を共有し、残された課題・新たな課題を確認することを通して、教員としての4つの力を大いに高めるための場であると同時に、教職大学院の教育活動を広く県内外の教育関係者の方々に知っていただく場ともなっており、例年、青森県総合学校教育センターをお借りし実施して参りました。コロナ禍の影響もあり、一昨年度は弘前大学にて対面での開催、昨年度はオンラインのみでの開催となりましたが、東京都、埼玉県、京都府、長野県、大分県からも御参加いただくことができました。御参加いただきました方々からは、様々な視点から質問や提言がなされ、2年次院生にとっては大きな学びの場となり、1年次院生にとってはこれまでの研究を振り返るとともに、2年次に向けて研究の方向性を確認する場となりました。今回の教育実践研究発表会に際し、多面的な視点、現場の目線で御助言・御講評くださいました弘前市立石川中学校長 木村傑先生、藤崎町立藤崎中央小学校長 横山浩是先生、弘前大学教育学部附属特別支援学校長 川村泰弘先生、三沢市立第一中学校長 米内山誠毅先生に心からお礼申し上げます。また、院生に多くの気付きと励ましをくださった県教育委員会の先生方を始め、御参加くださった皆様にも心から感謝申し上げます。おかげ様でこれらの発表会を通して、目指す4つの力が大いに高められましたことに感謝しております。



〈編集・発行〉  
 弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻  
 (教職大学院) News Letter 第16号 2022.5.18発行  
 〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地  
 Tel 0172-36-2111 (代表)  
 メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp  
 H P弘前大学教育学部(教職大学院をクリック)  
 弘前大学教職大学院 入試フォローアップ部会